

いなほ

第 23 号



1976年3月

桐山小学校

「いなほ」二十三号発刊にあたって

学校長 竹内佐四郎

人生の歩みは、いっぺんこっきりの清書である。それは下書きもできなければ書き直しもできない。ところでいかに多くの人が、このようなおごそかを忘れて、自分の人生を無意識になぐり書きしているのか。わたしたちはもっと真剣に、みずからのいのちをいとおしみ、つつましい祈りをこめて、人生を歩まねばならない。

長い人生のたそがれに立って――

たとえ、その生涯が偉大な栄光にかがやくことがなかりとも、また、たとえその運命が、涙と苦悩の放浪に終わることがあろうとも、その人の人生にそそいだ誠実と愛情は、清らかな深いかおりとして消えることがないであろう。

「いなほ」も誕生してから今年で二十三号になり成人の年にみぎのかかった力強い年です。卒業を心から祝い、六ヶ年の努力をたたえ、と共に、今日まで受けた周囲の人びとの恩をかえりみ、それへの感謝を忘れず、中学進学後の学業について励むとともに、生涯に通じて依るに足る信条をもって下さい。

「卒業生に贈ることば」

- ・健康はすべての母である
- ・努力は人生の父である
- ・心に太陽を持とう
- ・ひとを思いやろう

目次

「いなほ」二十三号発刊にあたって

学校長 竹内佐四郎

作文

一年生	一〇四
二年生	五〇八
三年生	九〇二
四年生	一三〇一
五年生	一七〇二
六年生	二一〇五
卒業を祝して	五七〇五
六年間の成長	五九〇五
よせがき	六〇〇五

表紙版画 六年

吉田 剛

ぐみとりと石あつめ

一年 すざわ みほ

水よう日に あさから ごんをうばしへ
いきました。

まさ子ちゃんと ゆかりちゃんと わたし
といっしょに ぐみとりを しました。ぐみ
には、あまいのや すっぱいのが ありまし
た。

ぐみとりが おわってから おかあさんが
つくってくれた おべんとうを たべまし
た。とっても おいしかったです。

おべんとうを たべてから 石あつめを
しました。石には、小さいのや 大きいのや
つるつるのや がさがさのが ありました。
石を あつめてから 石で かおを つく

りました。ゆき子ちゃんも いっしょにつ
くりました。とても おもしろかったです。

ぼくのうちの犬

一年 ながしま つとむ

ぼくの うちに いる 犬は 「チャコ」
といいます。

ぼくは、四じになると チャコと さん
ぽを します。でも、ふゆに なる と さ
びしく できません。なつに なる と か
うだを あらったり 水を かけたり し
やります。

チャコは はらが へると
「ワン、ワン、ワン、ワン、ワン」
と なります。ごはんを もって いって



やると、よろこんで、しっぽをふります。
そうして、おいしそうにたべます。

早く大きくなって、かわいい子犬を
たくさんうんで、ほしいなあとおもいま
す。

ぼくは、チャコが、だいすきです。

ぼくのおかあさん

一年 あおき あきら

ぼくのおかあさんは、小学校の先生
です。学校からよく本をかりてきて
くれます。

むつかしいかん字が、かいてある本は、
おかあさんに、よんでもらいます。

「ありがとう、チモシー」の本を、よんで

されます。

まなぶちゃんは、げん気で、かおいろが
まっかです。ていねいに、さんすうでも、あ
いうえおでも、かけるようになりました。

わたしが、本を、よんであげると、とても
よろこびます。これから、いっしょにあ
そんで、あげようと、おもいます。

ねるとき、まなぶちゃんは、おとなしく
ねます。

おかあさん

一年 いけはら なおみ

わたしの、おかあさんは、ガソリンスタン
ドでは、たらい、います。

まい日、おきやくさんの、くるまに、ガソ

もらいました。おかあさんが、いそがしいと
きには、よんで、もらえないので、チモシー
のえを、みています。

また、おかあさんの、こえを、ききながら
ぼくが、ねて、しまうことも、あります。

ゲームとか、すぐろくの、あいて、め、して
くれます。

ぼくは、おかあさんが、だいすきです。

おとうと

一年 やました すみこ

わたしの、おとうとは、「まなぶ」とい
います。

まなぶちゃんが、おこると、目が、ほそく
なります。わらうと、目が、まつげに、かく

リンを、いれたりして、います。おきやくさ
んが、たくさん、くると、おひるごはんを
たべるのは、おそいです。

わたしが、しゅうじのおけいこの日は、おか
あさんの、はたらいている、ガソリンスタン
ドに、いきます。そして、ジュースを、のん
だり、おかしを、たべたり、します。

おかあさんの、つくえの上には、でんわや
本や、けいさんきが、あります。

おかあさんの、かえるのは、六じすぎです。
おかあさんは、かえって、くると、ごはん
の、したくを、します。せんたくも、します。
おかあさんは、まい日、とても、いそがし
いのです。

ごんぞうばしへ いったこと

一年 のぐち ゆかこ

水よう日の日 先生と みんなで ごんぞうばしへ いきました。そして ぐみとりや石あつめを しました。

ぐみを 先生に とってもらったり、じぶんで とったりして たべました。

ぐみを たべると あまいのや すっぱいのが ありました。

おひるに なったので おべんとうを たべました。おともだちに あげたり もらったり しました。

それから すなや 石や 川のある ところへ いきました。

かわらには、いろいろな 石が ありまし

た。がさがさの石や つべつべの石や 白い字の かける石が ありました。

すなの ところで ゆきこちゃんと 字かくしをして あそびました。とても おもしろかったです。

字かくしを してから 石あつめをしました。あかやしろや ごましおの 石を あつめました。まるいのや ながまるいのや ひうたいのも あつめました。

かえるときは わたしの おとうさんの バスが きたので とても らくでした。

赤ちゃん

二年 神子 沢美 幸

わたしのうちの 赤ちゃんの名前は、「としゆき」といいます。

としゆきは 何でもなめます。おばあちゃんやおかあさんが、

「きたない、きたない。」

といっても、としゆきにはわからない。」としゆきってほんとに かわいいな。」と思います。

でも、としゆきはすぐ泣きます。大きな声で「ウギァー ウギァー」

と泣きます。だくとすぐだまるけど、気げんのわるい時は、だいてもだめ、おかせてもだめ、何をしてもだめなのです。わたしは、としゆきの泣き声に あきあきました。

泣きつかれてねむっている時は、小さい口

をとじて とてもかわいい顔をしています。

でも、目をさますとすぐ泣き出します。おかあさんがいる時は、おっぱいをのませます。が、いない時はミルクを作ったのませます。

わたしは、「としゆきが あまり泣かなかつたらいいなあ。」と思います。

おも ちつき

二年 佐藤 めぐみ

大みそかに、おかあさんとあつ子ちゃんの家のおもちつきに行きました。

はじめは、もちっこでつきました。もちっこはグングンと 大きな音を立てながら ついていました。わたしは、耳をふさいでいま

した。

しばらくして わたしたちは、おばあちゃんに まるくまるめたおもちを もらって食べました。弟たちは、まるでねん土をこねているように おもちやにしていました。それで食べられなくなると、わたしたちのあそんでいる間に めすんで食べていました。

はじめは、知らなかったけど 気がついてみると なくなっているのです。さてはと、弟たちに聞いてみると、わらっていたのです。ぐ はん人がわかりました。

こうして、わたしたちが あそんでいる間に、おかあさんたちは 豆もちを作っていました。

やがて もちつきがおわったので、わたし

たちは、おもちをもって 家へ帰りました。家では、神さまとつくえの かがみもちをかざって、

「今年も 一年がんばります。」

と おいのりをしました。

ふしぎなとけい

二年 金山 成美

わたしの家には、大きなはしらどけいがあります。わたしは、いつもこのとけいをふしぎに思っているのです。

それは、わたしがひとりで テレビを見ていると、とけいがおそくまわるような気がします。「おかあさん、早く来ないかなあ」と思うと、とけいが早く回るみたいです。わ

たしは、二年生になって はじめてこんなまどに気がつきました。

三時ごろになると、けいこちゃんや ゆかりちゃんがあそびに來ます。こんどは、わたしの気もちがかわって「おかあさん、六時ごろになるまで 帰って来ないように」と思いながら、「さぶとん取り」や「だるまさんがころんだ」をします。

ちやうど「いなかっぺ大しよう」が はじまるころには、みんなでテレビを見ます。わたしは、いつもかかさず 見ています。四時半ごろになると、みんな帰って行きます。

わたしは、またさびしくなります。そんな時、ひとりごとを言います。小さな声で「おねえちゃん まだ帰ってこないかな」と。

とけいが またおそくなるようにかんじます。わたしの気もちが かわってばかりいます。ほんとに ふしぎなとけいだな。中で小人がうごかしているのかな。

ひどい かぜ

二年 上田 弘恵

朝おきてみると、何だかひどかったの。「おかあさん、ひどいよう。」

と いいました。おかあさんは、

「大じょうぶ、ねおきだからだよ。」

といって、だい所へ行ってしまいました。けれども、学校へ行っても頭がいたいので、三時間で早引きました。

パジャマにきがえ、ねつを計ってみると、三十七度五ぶありました。

「これくらいなら まだ、いしやへ行かなくてもいいよ。」

とおかあさんがいいました。

つぎの日のおひるに はかってみると、こんどは三十九と四つありました。おかあさんは「これは大へん、いしやへ行かなくちゃ」とびっくりしました。タクシーをよびましたが、あまりおそいので 頭がいたくてふらふらしました。

おいしやさんへ行つて のどをみてもらい、少し太い注しやをしてもらいました。しんさつ室を出てから、

「いたかったなあ。」

と いいました。またタクシーで帰りました。

水まくらをする時、おかあさんが

ぼくの勉強べや

三年 小杉知之

二 三日前の朝ごはんの時、ぼくは、勉強べやがほしくて、おとうさんに、

「ぼくの勉強べやつくつてよ。」

と たのみました。おとうさんは、

「どこに つくるが。」

と、聞いたので、ぼくは、二階につくつてくれるように 言いました。

それから なん曰かたって、おとうさんがつくえを重やうに二階へ上げてくれました。ぼくは、そのあとで、本や勉強道具やいろいろなものを整理しました。だんだんきれいなへやに かわっていきます。と中でおとうさんが、大きな声で、

「雪があるから たすかるな。」

と いていました。ねている時も、学校のことを そうぞうしていました。たとえば「今、みんな音楽をしているよ。」

とおかあさんにいたり、「みんな給食を食べているかな」と 考えたりしていました。

気分のよい時には、テレビで勉強したり、弟とあそんだりしていました。

そんなことを している間に、とうとうハ日間もの長い間 休んでしまいました。学校の勉強が、おくれなかつたらうかと心配です。今、弟が かぜにかかって ねています。わたしも また、かからないように 気をつけています。

「本だな買ってくるわい。」

といって いそぐように出かけていきました。かたづけ終って、ひと休みしていると、ニメートルほどの大きな本だなを買って帰ってきました。重い、りっぱな本だなが、ぼくの部屋に入り、ぼくは、いっしょうけんめいの本を本だなに入れました。

古い本も、つくえも、たいへん、たいへん、りっぱに思えました。

家

三年 神子沢 徹

今年の春、ぼくの家を、たてることになりました。いままでのわがままが、とおらくなりしました。

きのうは、家をこわす日でした。雨の中、

朝早く、近所の人たちが、来てくださいました。おとうさんや、おかあさんは、「雨の中も、どうもありがとうございます。」と、来る人ごとに、ていねいに、あいさつをしていました。

話は、かわりますが、家こわしの前の日のことです。夜の7時10分前の天気予ほうで、富山県は、あす雨だといいました。おとうさんは、目をまるめ、口をしぼませ、「んう。」

と、不安そうな、太いため息をつきました。おかあさんは、じゅう血した目を、テレビにむけ、不安そうな顔をしていました。不安はこれだけではありません。家をたてるための、たくさんのしゃっ金、それが、一番のなやみ

と。

でも、ぼくは、その不安には、負けないぞと、思いました。

たいやき

三年 長島みのり



きのう、おかあさんに、たのんで、たいやきを貰ってきてもらいました。わたしは、どんなたいやきだろうと思うと、むねが、ドキドキしました。よく見ると、「たいやきくん」の絵と、まったくちがっていたので、安心しました。食べるとき、どこから、食べようかと、まよってしまいました。弟も、わたしと同じで、まよっていました。食べ終ってから、たいやきが、おなかの中で、どうなっているかと思うと、とても心配になりました。たいやきが、おなかの中で、およいでいるのでは……

です。

ぼくは、家をたてることに、さん成も反対もしません。だけど、ただ、ただ、不安なのです。

家がこわされると、ぼくたちは、なやです。ごさねはなりません。なやです。ごすのに、一番、めいわくしたのが、ねこです。自由な場所がなくなり、かごの中に、とじこめられてしまったからです。かごから出して、ぼくが、ねこをだしているのを見た、にいちちゃんが、「かわいそうやけど、かごの中に入れてこい」というのです。ぼくは、しかたなく、かごに入れました。かわいそうなねこを見ながら、ぼくは、また、不安になりました。『ぼくも、もしかすると、しゃっ金するかもしれない』

夜中に、たいやきに、追いかけられているゆめを見ました。びっくりして、目がさめてしまいました。そのあと、なかなかねつかれませんでした。考えてみると、たいやきを食べたせいだと思いました。

しばらくして、また、おかあさんが、たいやきを貰ってきました。でも、今度は、ドキッとしませんでした。

うちのねこ

三年 坂東ひとみ

わたしのうちに、「白」というねこがいます。白は、新川鉄工から、もらってきました。はじめは、家のすみっこにいましたが、二三日たつと、わたしに、なれました。

わたしは、毎日、白をさわっています。白の、ごはんのせわは、わたしのやくです。白

のすきなものは、さばの水にです。おかあさんや にいちゃんが、その白のすきなものを買ってきてくれます。白は、よろこんで、うまそうに食べます。

白は食事がすむと、戸を、あけてきます。

おかあさんは、それを見て、

「戸をしめていかんかい。」

と、となります。そのあとですぐ

「ひとみ、ねこがかりやろ。」

と、いいます。わたしは、しかたなく、戸をしめにいきます。いたずらもするけど、白は

大へんかわいいです。

やくそくをやぶったおっちゃん

三年 田中政博

ぼくは、スキーに行きたかったので、お

牛のせわ

四年 大田景子

わたしの家は、牛をかっています。牛にゅうを出しているのが三十一頭、出していないのが二十一頭、子牛が八頭で、みんなで六十頭になります。

だから、朝から夜まで大へんないそがしさです。おとうさんとおかあさんは、牛にゅうくばりとえさやりで、おじいちゃん、えさのハイフード作りで、おばあちゃんは、べつの牛ごやの七頭の牛のせわです。それでも手がたりないので、わたしも手つだいをしてあげることになりました。

わたしの手つだいは、子牛にミルクをやる仕事です。毎日、夕方の六時三十分には、牛ごや

とうさんに、たのむと、おとうさんは、「急がしいからだめやぞ。」

と、言いました。まわりにいたみんなが、大わらいしました。おとうさんがだめなら、ただゆしおっちゃんに聞いてみようと思ったけど、「だめだー」と言われると、おっかないから、やめました。それで、としゆきおっちゃんに聞くことにしました。おっちゃんは、「今度の今度の日曜日につれて行ってやる。」と、やくそくしてくれました。

「だれでも、つれていってもいいじゃ。」

と、いつていたくせに、土曜日に、きくと、

「ほかのとき、ほかのところへつれてやる。」

と、いきました。次の日曜日、だめでした。

ぼくは、おっちゃんに、「次は、せうたいに。」と思いきや、

に行くと、わたしがミルクをやる子牛五頭が、

「モーモー。」

と、はらがへったなき声でなっています。わたしは、

「まっこれ、今すぐあげるからな。」

と、言って、仕事をやり始めます。

はじめに、バケツにふろに入るぐらいの、お湯を入れて、次に、ストロー付きのバケツに入れて、バケツ三つを、このある所へ持って行って、小さいかんで、だぶんというこなを二はい入れて、あわたてきでまぜます。できたミルクを一頭にやり、その間に、次の牛の分のミルクを作ります。

三番目の子牛は、飲み方がへたなので、「この子牛は、みんなの中で一番大きいのにどう

してへたなのだろう。」と、思います。

最後の一头だけは、ほかの子牛とちがって、カーフトップというこなをまぜてミルクを作ります。この牛は、ほかのより小さいからです。ほかの子牛は、ミルクを飲むのが速いがこの牛は飲み方もすぐおそいです。

みんなにやり終ったので、お湯を出した所へバケツを持っていき、

「終ったよ。」

と、牛にゆうをしぼっているおかあさんに、

言いに、行きました。すると、

「バケツもちゃんとあらったかい。」

と、言われました。わたしは、

「あっ、まだあらっていないかった。」

と、言って、バケツをあらうに行きました。

の話などをして、にぎやかな夜になります。

わたしは、これからますます手つだいをしようと思います。

ぼくのふでばこ

四年 藤堀一志

今まで使っていたぼくのふでばこが、こわれてしまった。ぼくが、知らない間に、母が所から新しいふでばこを買ってきてくれた。

ふでばこは、緑色で、ふたには、レンズがついている。そして、ふたの先には、「おす」と書いてあり、そこをおすと、自動できこぶたがあくようになっていく。とても便利なふでばこだ。

たては、十七センチぐらい、横は、六センチ

水がすごく冷たいので、あらうのがいやになります。でも、「おかあさんたちは、一日に何十回も冷たい水にさわっていらっしやるのだ」と思って、わたしは、がまんしてやりました。手がこおりそうなくらいなので、すこし湯を出して、ブラシでバケツをあらう。ストローのまわりや、ストローの中をあらう。すすぎ、台の上にのせて終りました。

それだけ手つだうと百円もらえます。それに、わらをやったり、おがくずを入れたりすると、百五十円くださいました。

こうして、わたしの家は、みんなで働いて楽しい夕ご飯になります。わたしも手つだいをしているので、ご飯もたくさん食べられます。ご飯が終ると、テレビを見ながら、学校

チぐらいの広々としたふでばこだった。

ふたのレンズには、今、えのぐがついている。三年の二学期の図工の時間だった。えのぐのチューブのふたがとれなかった。うしろの方をやぶってえのぐを出した。手についたえのぐをふでばこにぬりつけてしまった。レンズは、少しむらさき色にぼやけて見える。ぎざぎざの方にも、色がついている。そこには、赤色と、黒色がついている。赤色は、家で、いたずらした時のもので、黒色は、えんぴつのしんをけずったりした時のものだ。

また、三年生の時、たかし君がシールを持って来た。ぼくはその時、数字のをもらった。それをふでばこのうしろの方にはった。新しい時は、かつこうよく見えだが、今は、どこ

るどころはぐれてしまった。かつこうが悪く
なったなと思う。

それから、はしの方が、えんぴつのしんが
あたるので、まっ黒になつてしまつてゐるし、
さずもつてゐる。

そのほか、いつの間につけたのか、白いえ
のぶもついて、だいぶよぶれてゐる。

ふではこは、ふたのレンズには、むらさき
色がぬつてあり、うらの方にシールが十まい
ぐらひはつてある。だから、表がわから見え
と、むらさき色がきれいに見られるが、うら
がわは、はぐれかかったシールなどで、いつ
も「きたないな」と思つてゐる。

今、ふではこには、えんぴつが三本、けし
ゴムが十一こ、分度器が一まい、ものさしが

人と犬

五年 中島 忍

ぼくは、家の用事で町へ出かけた時、のら
犬が集つてゴミをあさり、あたりをちらかし
てゐるようすを見た。これはみんな人間が悪
いのだと思う。人間が氣に入らなくなった一
匹の犬をすて、その犬が子どもを生み、そ
してたくさんのおら犬になつていくのである。
二か月前まで、ぼくが、かわいがつてゐた
犬が急に苦しみを出した。葉をのませたり、か
めだをなでながら、ひと晩中かいはうしたが、
ついに死んでしまったのである。それからと
いてものはさびしくなり、犬を見
ると、もういてゐだつてむいられ
なくなり、ついに犬のそばにかけ



(スピッツ)

一本、コンパスがーご、それにナイフがーち
ようというように入つてゐる。だから、ふで
はこの中は、いっぱいになつてゐる。「こんな
にいろいろなものが入つてゐるせいで、ふで
はこの中もよぶれてしまつたんだなあ」と、
ぼくは思った。

こんなによぶれてゐるふではこだけど、ぼ
くは、このふではこが、とてもすきだ。この
ふではこの中には、いろいろな思い出がたく
さん入つてゐる。ふではこを見ることに、い
ろいろなことを思い出す。

このふではこを、こんなにきたなくしたの
は、ぼくのせいなのだ。これから、このふ
ではこを、「たいせつに使つていこう」と思
つてゐる。

寄つてきつてしまふ。犬は尾を振り「あり
がとう」といつてゐる。こんなかわいい犬、
ぼくをなぐさめ、はげましてくれぬ犬、どう
してすてぬのかわからない。その人がにく
なつてくる。

この犬は、いたすらしめし、雑種で価値の
ない犬だと、人々がそんなことをくりかえし
ていたら、今にこの日本がのら犬だらけにな
つてしまふ。手がけた犬を責任もつてかうこ
とがたいせつである。春にはぼくの家には犬が
やつてくる。二度とあのようにならな
いようにかわいがつてやろうと思つてゐる。

研究

文字の成り立ち

蛸谷 ゆかり

テレビを見たらコマースィナルで「青い

という字は、「い」とくさしという字で出きて
いるといっていました。そこで他の字はどう
やって出されたのかと思い辞典で調べてみまし
た。すると漢字は四とおりの方法から作られ
たことが解りました。

一つは、象形文字しょうけいもんじといって、ひとつの物を
かたどったものが変ってきてできたものです。
たとえば、月、山、口、耳、手、などです。

二つめは、指事文字しじもんじといって点や線だけを
使ってきたもので、三、上、中、下、など
です。

三つめは、会意文字かいいもんじといって意味を合せて
作ったものです。曇という字は、日の下に雲
と書きます。お日様の下に雲が出るという意
味から作られたものです。このような字は他

がある。まさにそのとおりである。

給食のおばさんは、私の尊敬している人の
ひとりに入ります。

最初に、ベーターベンである。体が不自由
にもかかわらず曲を作り続けたからである。

次に、父母、風雨の日も寒い身のいたいに
もかわりらず毎日働いてくくれるから……

そして給食のおばさん方である。体の痛い
いやな日もあるでしょう。だが家族の二十倍
以上の人々の給食を作るなんてなみたいとい
の苦勞ではないと思います。毎日ほんとうに
ありがとうございます。

今日のおかず何だろう。にんじん、だいご
んの煮物、おろし、私の嫌いな物が出てくる。
こんな時おばさんがにくい。だが給食がなか

にたくさんあります。みなさん調べてみませ
んか。

次に、形声文字で、一方を音読みするもの
です。性質の性、仕事の仕がそれです。

また、ひらがなは漢字をくずして（あー安）
でき、かたかなは漢字の一部分をとったり、
全体を略して作られています。

このように、昔の人々のくふうによって、
わたしたちが便利になっております。みなさ
ん、がんばって何かをのこしていきましょう。

給食週間

尊敬しているおばさん

五年 上 島 明 美

私は、給食が大好きだ。いつか「給食のお
ばさんは、汗水を止しながらおいしい給食を
作ってくださってありがとう。」と書いた覚え

があったらどうなることだろうと思う。そして、
栄養を考え、手を赤くして作ってくださった
ことを思うと感謝し、おいしく食べます。

心のやさしい給食のおばさん、からだに気
をつけて、いつまでも、暖かい給食を作っ
てくください。毎日ご苦勞さまです。

詩

古い木

五年 杉 田 由美子

家の前にある高い木、古い木
太く、大きく、力強く、そびえ立っている。
春には緑の葉をつけ

夏はまぶしい日の光をあびて

秋には赤や黄色にそまる

やがて冬の音が聞えるころ

木の葉が散り、枝だけ残る

四季を通じ、たくましく生きている

この古い木は きつと

たくさんのものを見ただろう

たくさんのことを聞いたであろう。

朝 五年 青木 博人

朝は、ぼくたちを起こしてくる

心もがらりと晴れ 明るく気持ちよく

まっかな朝日がのぼり

所に、村に、新しい一日がやってくる

朝日は、地球のシンボルだ

小川 五年 大田 雅美

かわいそうな小川

茶わんのかげら すてたゴミ

いつも 泣きながら 流れている

でも 小川は 何もいわない

おまえは それでいいのかい

夜の星空 五年 新村 千鶴子

夜の星は きれいだ

まばゆいばかりの光をかがやかせて

どこまでも続いている

ときに 雲にさえぎられ 空は真黒だ

雲がとりのぞかれると 青空に

金鳥が飛立つように とても美しい

書初大会 五年 吉田 仁史

「はじめ！」

静まりかえった会場にひびく

筆を待つ手、ふるえる手

静かに動かし 書きおわる

「初日の出」

ぼくの心は 明かるい



卒業記念文集

キャンプ

吉田 修（道下）



この六年間で一番、思い出に残ったのは、
キャンプです。それはどうしてかというところ、
自分たちでごはんや、おがずを作ったからで
す。

七月の末、ぼくたちは、舟川の上流へキャン
プに行きました。出発の日はとてもよい天気
で、気持ちのいい日でした。荷物を組合のトラ
ックに積み、ぼくたちはマイクロバスに乗り
ました。みんなは車中で、いろいろな話をしな
がら、キャンプ場につくのを待っていました。
小道はガタガタの悪い道でした。

いよいよキャンプ場に到着し、トラックから
荷物をおろして、テントをはる所まで運びま
した。みんなそろったところで、テントをは
ったり、かまどをつくったりしました。あと
は自由時間で、川に入って遊んだりして、一
日がすぎました。

夜はテントに入って、今日のできごとや、
おもしろかったことを話し合いました。また、
ぼくたちのテントと、満員たちのテントに、
トーンシーバーがあったりして、いっしょに歌
を歌ったりして、はじめてのキャンプの一日
を終えました。

二日めがきて、みんなで力を合わせて、こ
はんをつくりました。その日はキャンプア
イヤーの日で、まきを集めました。夜のこは

人はカレーライスでしたが、とってもおいしくできていました。

晩になり、いよいよキャンプファイヤーが始まりました。島さんが木に火をつけて、歌を歌ったり、ゲームをしたりして遊びました。最後はモリ松を持って、テニスのオヘ帰りしました。

三日めは、昼ごはんを食べると、帰りのしなくにかかりました。テントをこわして、荷物をトラックに運びました。帰りの準備が終めると、マイクワバスに乗って、キャンプ場をあとにしました。

そして、学校に着りてから、先生の話を聞いて家に帰りました。

しかられまりかと思っていました。とてもおもしろい先生でなりました。

四十九年八月二十一日のことです。私がいつものように家に帰ると、おかあさんのくつがあったのです。私はおばあちゃんに、「おかあさん帰ってきたあ」と聞くと、「おかあさん、屋根から落ちてけがした」といいました。私はおばあちゃんに、「じょうだんごりつてりると思いましたが、買物に来ていも人が「ほんとやぜ、今車に乗って小林病院へ行ったけど、だめながで魚津の分館へ行、て入使すう」といいました。私はびっくりしてしまいました。

その日から、おかあさんがいなかったので、とてもさびしいと思いました。おもしろき

六年間の思い出

上田 洋子（桐山新）

卒業まであと少し、中学校最後の生活が、もうすぐ終ろうとしています。

私にはこの六年間、いろいろなことがありました。男子とけんかして、泣かされたこともあったし、男子にかくされたカバンを、ササでさがしまわったこともありました。

その点、一二年の頃はそんなことはありませんでした。いつも学校へ来るのが楽しくてたまりませんでした。先生と話をするのが楽しいのですが、それ以外の私はニヤニヤ、笑っていることが多かったようです。

四年生になると、担任が谷先生になられました。谷先生になった時、はじめはこわくて、

のすがもつと、さびしいだろうと思いました。「おかあさん、早く直ってね」と心にいひながら、おかあさんを待つてりました。こうしてみると、六年の間にほんとにいろいろなことがありました。

私は今、なんておっちょこちよいなんだろう。なんであんなことをしたんだろう。どうして、こんなことがわからないんだろう。後悔がいっぱいです。でも私にとって、小中学校生活は、一生忘れられない思い出になるでしょう。

キャンプ

鍋谷 謙二（道上）

「みんな集まれ」という先生の声がする。

今日はキャンパー日めである。ぼくたちは、テントの作り方を聞きこける。それからジャニターで場所をきめた。

ぼくたちはナツソク、きめられた場所にいて、テントを作り始めた。先生にもってだつてもらつて、仕事をした。そして、やつとできた。テントの中は、すつ、黄色だった。なんだが考えていたよりませまかつた。でも、テントができてゐる。

いろいろしてゐるうちに、お昼になったので、ごはんを食べることにした。お昼はべんとうだった。夕はんはつくつて食べるからと思つて、おにぎりを全が食べた。

しばらくしてみんなが呼ばれた。ごはんのたまをよそゆるのだ。教師先生がなきてく

りうつちに、ぬめてしまった。

次の日の朝、起きてラジオ体操をした。やがて朝ごはんをつくる時間になった。ぼくは今度は、どんなのができるのかなと考へると、こんだてをもつと、簡単にすればよかったと思つた。そして「これから二日間どうなるのか」と、少し心配になつてきた。

六年間の思い出

吉田 剛(道土)

長い年月も、大変短かく感じた六年間、そして、この六年の間の、いろいろな思い出が、頭の中にくかんでくる。

たとえば、はずかしがつた例としては、五年生の大運動会の時のことを思い出す。

だった。なんだがどうどうして、夕はんどしが食べられなかった。あれじゃあたりませんだと思つた。ごはんを少ししか食べないので、腹がへつてたまらなかり。おにぎり残してあげば、よかったと思つた。

おにぎりを、花火をやることになった。ぼくはみんなが、だいたいやつてかゝつた。花火が終わり、てゆることになった。

テントの中は、かり中電燈でてゐる。「電氣がもつたりなりなあ」と思ひながら、みんなと話してゐた。たりくつだからゆうと思つたが、剛君と清君がへびの話をしてゐる。ぼくも頭の中で「ミナセーナほどあるのが、にやうつとこへ入つてきたら、どうなるかなあ」と思つた。そんなことを考へて

ジャンケン競走である。予行演習の時、うまくゐつてゐたので、多少自信があつたのだが、本番の時はきん張したせいか、最後のジャンケンで、なかなか勝てなかり。しまりには一等だったのが、ザベになつてしまった。

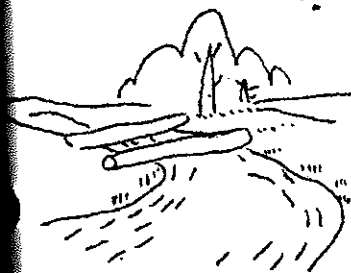
また、その夏村にうれしきこともあつた。それは、二年から四年間、連続県の習字大会にいられたこと。また、キャンプで自分たちの作った食事が、きん張あつたことである。この楽しい思い出は、いつまでも忘れられなかりだろう。

長い六年間、いっしょに勉強した、いっしょに遊ぶ、よく遊んだ講堂やグラウンド、いっしょに歩いた通学路、いっしょに遊んだ、勉強したり、いっしょに話相手になつてくれた友だ

ち。いろいろおしゃをかけた先生や父母。家で楽しんだテレビ。どれもこれも大変なっかし。

今度は中学生になるのだから、小学校以上に、みんなに負けないうに、勉強しなくてはならぬ。また、新しい中学校に行くためには、どうしてもみんなと、別れなければならぬ。そのことが、ちんとなくつらい気がする。

大変な感じがした。この六年間の思い出も、大事に胸にいだいて、中学校へ行きたいと思ってる。



りました。ぼくたちのグループは、よく飯です。できるとテントの中へ、持って行って食べました。夜は本を読んだり、ほかのテントへ行って、遊んだりしてから寝ました。

次の朝になると、ぼいたいの人が起きていました。朝飯を食べてから、川で泳いだり、そのほか、いろいろ遊びをしました。それから、キャンプファイヤーをするための木を集め、歌かけりこをしました。

夜になり、キャンプファイヤーが始まりました。ぼくたちのグループは、劇を考えて、なかつたので、歌だけをしました。それから、みんながゲームをしたり、歌を歌ったり、花火をしたりしました。そして、テントに戻る時、たい松を持っていききました。

キャンプ

坂東 聡（四ノ又）

七月二十二日、ぼくたち六年生は、舟川の上流へキャンプにいきました。

その日の朝、学校に来てから、トラックに荷物を積み、ぼくたちはマイクロバスに乗りました。舟川へは三十分ぐらいて着いて、トラックから荷物を運びました。

友はテントづくりです。まず、下に草を持ってきて、それから組み立てました。張り終わると、テントの中に草を入れて、布をくくるとでき上がりです。それから、ご飯の作り方の勉強と、かまど作りをしてから遊びました。

夕方になったので、ご飯をつくることにな

最後の日のお昼は、ご飯をつくらず、ジュースやすいかを食べました。それから少し遊んで、帰りの用意をして、トラックまで荷物を運んで帰りました。

ぼくは、楽しかったこのキャンプのことは、卒業しても忘れないうちと思えます。

忘れないキャンプ

松田 満（小杉）

今日はとてもあつち。ぼくたちは、学校を九時ごろ出発して、今舟川上流のキャンプ場に来てみる。

重い荷物を持って、ひどい道をキャンプの場所まで歩いていく。それが終わると、今度はテントを組み立てた。このテントは、五人

がねら来るようになつてゐる。

テントの設置が終わつて、日がく水ると、
いよいよ夕食である。今晚のメニューは、五
目めしと、ササ汁である。しばらくしてでき
あがつた。食べてみるとすごくうまかつた。

夕食を終え、あとがたづけをすると、自由
行動である。ぼくはテントの中へ入つて、ラ
ジオを聞いたり、トランプをしたりした。

次の朝、六時三十分起床。それからラジオ
体操。それが終わると朝食である。そして、
自由行動。ぼくは川で泳いだ。川の水は冷た
くて、ぶるぶるふるふるほどである。

それから朝食をすませ、今度は津のすへ行
った。津の中は暗くて、まるで何かが、どて
くるような感じがした。

キャンプ

水越 正志(道上)

バスは、舟見を通つて、舟川の上流へ入つ
た。道が悪かつたので、バスはすごく、ゆれ
た。

バスをおりると、草はぼうぼうとけえ、木
はしげり、道が悪くてびくびくした。川原に
下りて草をかいて、テントを作った。中に入
つてみると、とても暑く感じた。それから、
しばらく遊んで、昼食になった。

次の日の昼ごろ、テントの中へあぶが入つ
てきて、こわかつたけど、あぶをたたいたり
して、テントの中から、追ひだすのに、大さ
わぎをした。

暖暗くなると、一回めのキャンプファイヤ

二日めの夕食がすむと、いよいよキャンプ

ファイヤーである。ぼくたちが集めた木に、
火がつけられた。そして、各班ごとに、歌を
歌ったり、花火をしたり、全員でゲームをし
たりした。最後にぼくたちは、一人ずつたし
松を持って、テントの方へ帰った。

三日めの朝食がすむと、帰りの用意である。
また、重い荷物を、道路にあるトラックに積
み、ぼくたちは、マイワロバスで、学校へ帰
った。

ぼくは、この楽しかつた、二泊三日のキャ
ンプを、一生忘れないうつ。



ーが始まつた。花火をしたり、そのほか、い
ろいろな遊びをした。

それが終わると、テントに入つてゆた。ぐ
っすりとおていする時に、なにか足の方で、動
くものがある。みんな起きてその話をした。

それで、なかなかわかなくなつたので、今
度はトランシーバーで、こっそりと遊んだ。

二日めは、川で遊んだり、食事をつくった
り、食べたりにいるうちに、暗くなった。

夕方になると、お父さんやお母さん、お兄
君の家の人たちがやってこられた。お二君は、
野うさぎのすももを持ってきた。よくきくと
家のお父さんが、つかまえたやうだ。かわい
うしいうさぎである。次から次へと、父兄
の人たちがたせりこらわして、大変にぎやかに

なった。

二日めの晩にも、キャンプファイヤーをした。最後にタイマツに火をつけて、テントに帰ったことが、心に残っている。

次の朝はぬあくて、ながなが起きられなかった。お昼を食ふと、舟を下って、小学校に帰った。このキャンプは、ぼくの一生の思い出になるだろう。

転校

中川 和浩(道下)

ぼくにとって、六年間の中で、一番心に深く残っているのは、転校してきた時のことです。

魚津の村小中学校から、この棚山中学校へ

休みの行事として、道上部落で楽しく泳ぎました。翌年には、ぼくたちにとって、楽しいスキー場もできました。

五年生から六年生になる時、受け持ちの各先生が転動していかれたので、ちよつとさびしくなりました。また、最高学年になったので、この一年間一生けん命、がんばっていきたいと思いました。

昨年学校には、自然に親しま緑化運動で、美しい庭ができて、学校の校庭もりっぱになりました。

季節にあった夏のプール、冬のスキー、それに、運動会やキャンプ、五年の時の学習発表会なども、六年間の思い出として、心に残っています。

転校してきたのは、小学校三年生の、夏休みの時でした。

毎朝、ラジオ体操に行くのは、とてもはるかかったが、そのうちに、友だちも少ずつてきてきました。

やがて、登校日が来しました。学校に行くと、知っている人もいましたが、知らない人が、ほとんどでした。学級の生徒と親しくなるのに、一生けん命がんばりました。

ときには、転校生と行って、いびられたこともありました。これほどいやだったことはありません。

誰とも親しくなれたのは、五年生ごろからでした。このころは学校にプールもでき、夏

あと少しで、中学生になるけれど、自分で精一ぱい努力して、人に負けないう、勉強や運動に、がんばりたいと思います。

キャンプ

鍛冶 聡美(道下)

私がこの六年間で、一番心に残ったのは、キャンプです。キャンプに行った時は、とても楽しくてゆかりでした。

七月二十二日、私たちは学校を出発して、舟川上流のキャンプ場に着きました。そして、みんなで一生けん命、荷物を運びました。運び終わると、先生にテントの張り方を習い、自分たちのグループで、手分けしてテントを張りました。

辺は、ごはんを作る所を作りました。先生にどうしたらいいか教えてもらって、みんな石を集めてきて作りしました。わがらなりとこがある。先生に聞いて、やっとできあがりました。

二日めの夜、いよいよキャンプファイヤーです。みんなよろこんでいました。朝からみんな、木をたくさん集めてきました。キャンプファイヤーでは、みんなが歌を歌わなければならぬので、練習しました。

夜になつたので、みんなキャンプファイヤーをする所へ集まりました。歌を歌いました。みんなおぼえていれたので、よくそろいまでした。それから、グループごとに考えた劇や、いろんなゲームをしたりしました。

キャンプ

長島 貴子(道下)

私たちは、七月二十二日から舟の上へ、二泊三日のキャンプに行きました。

はじめに荷物を、キャンプ場まで運びました。運び終わってから、場所をシヤンケンで決め、そこにテントをはりました。それから、お昼ごはんを食べて、自由に遊びました。

次の朝は、みんな早く起きました。顔を洗う時は、水が冷たくて、体がふるえそうでした。それから、ラシオ体操をして、朝ごはんを作って食べました。

そのあとで、みんなは川にプールを作ったり、泳いだりしてました。また、自然をカメラで写す人、散歩していろんなものを採りました。

た。みんなとても、楽しそうでした。やがて火が小さくなり、消えそうになったので、みんなで、「きょうの日はさようなら」を、歌ってキャンプファイヤーを、終りました。みんなこの晩は、ぐっすりとゆったようです。

三日めの朝、私たちは学校へ帰る準備をしました。荷物を運んだり、テントをがたづけたりしました。そして、グループごとに、写真をつづしてもらいました。

それから、私たちはバスに乗って、学校へ向かいました。私はどうも、とっても楽しいキャンプでした。



二日めの夜に、キャンプファイヤーをしました。はじめに神様が、ちかひのことはさのべられました。それから、みんなが作った歌や劇を見ました。

私たちのグループは、「競走は続くよどこまでも」と、「桃太郎」をやりました。また、いろんなゲームもしました。最後にみんなで、「星かげさやかに」を歌い、一人ずつたりんごを持って、テントに帰りました。ほんとに、楽しく思いました。

三日めの昼食がすんでから、テントをかたづけ、荷物を運んでキャンプ場をあとにしました。

小学校六年間の中で、このキャンプが一番、一番に覚えている。良い思い出です。

六年間の思い出

青木 十春（道上）

遊んだり、勉強したりしたこの六年間をふりかえって、思い出に残ることを、二つ書きます。

はじめは、私が二年生の時、羽島で富山へ行ったことです。

そのころ私は、習字を習っていた。そのため、学校の書初め大会で、成績がよかったので、富山で習字を、書くことになったのです。

その時富山で、受持ちの竹内先生に、買ってもらったものは、今も残っています。これが、低学年の時の思い出です。

今は六年生の時のキャンプです。二泊三日

キャンプ

青木 克己（荒又）

ぼくたち六年生は、七月二十二日から二十四日まで、二泊三日のキャンプをすることに、なった。目的地は舟川の上流である。

終点に着くと、車につんである荷物を運んだ。それが終わると、先生たちにテントの作り方を教えてもらいながら、自分たちでテントを作った。先生たちは本部や便所を作っておくれた。やがて、フアンターをくばってらったのんだ。のどがかわりていたせいか、とてもおいしかった。

お昼ごはんが終わってから、布でかまど作りをした。ほかのグループよりも、かまどがよかった。けれども、夕食に作った五月め

の短かい団体生活だったが、小中学校生活で、一番思い出に残っています。

キャンプファイヤーをしたり、食事を作ったり、友だちと遊んだりしました。たりへん楽しい三日間でした。できれば、もう一度キャンプをしたいと思っています。

この二つが、一番楽しい思い出ですが、そのほかにも、学習発表会での劇、金沢や松ヶ峯に行った遠足なども、なつかしい思い出として、心に残っています。もうすぐ中學生になります。これらの楽しい思い出は、決して忘れないうちだと思います。



しは、学校のおばさんが、作ったようにおいしかった。

夜になると買ってきた花火を、みんなが川のうにに向けてやった。十五連発のすごいのもあっておもしろかった。

花火が終わったので、リニソクの中から、ふとんととりだしてゆた。朝あきてみると、満員がテントから、足をだしてゆているので、みんなは、ぼくたちのテントのオト、集まってきました。

朝ごはんを食べてから、自由時間になったので、みんな川に入って、えんしう魚みたいなものをつかまえていた。和治君はナギも、つかまえたといっていました。

夜になり、まちに帰っていた。キャンプフ

アイヤの時間になった。ぼくたちが昼のう
ちにひろって来た木の枝が、四角につんであ
った。政人のとうちゃんが何かいうと、鳥さ
んがひもと引いて火をつけた。それから、刺
やゲームをして遊んだ。最後にたき火に火を
つけて、テントに向かった。

帰りの日になった。テントをしまって、車
のある所まで持っていった。残ったギョース
けの人だり、学校へ持っていったりした。

このキャンプは、一生の思い出として、
心に残ることだろう。

キャンプ

前田 清春（桐山新）

七月二十三日の朝、学校から車で、舟川

上流のキャンプ場へ行きました。

荷物を運んだあと、ジヤンワンをして、テ
ントをはる場所をきめました。そして、先生
にテントのはり方を聞いたら、グループご
とに、草をいっぱり集めて、テントをはりま
した。

それから、先生にがまどの作り方を、習っ
たので、グループでいい場所をさがして、か
まどを作りました。そして、教頭先生にはん
ごうでの、ごはんのたき方を習いました。

外で遊んでから、テントの中へ入ろうとし
たら、ハチがいたので、ハチをテントから追
い出して、テントの中へ入りました。

しばらくして、キャンプファイヤーで使う
木を、いっぱり集めました。それから、夕ご

はんの用意をして食べました。

やがて夜になったので、キャンプファイヤ

ーをしました。先生にくばってもらった花火
をくたり、ゲームをしたりして遊びました。

おわりに、火のついたたい松を手に持って、

テントのオにもどってから帰りました。

次の朝おきて、ラジオ体操をしてから、ご
はんをつくって食べました。そのあと、川で
泳いだり、魚をつかまえたりました。

三日めの昼ごはんが終わってから、テント
をかたづけて、帰る用意をして、マイクロバ
スで学校に帰りました。

キャンプの三日間は、とても楽しく感じら
れました。

桐山小学校に入学して

中田 泉（道正）

私が、魚津の大明小学校から、桐山小学校
へ転校してきたのは、四年生の十一月ごろで
した。

母と一緒によに職員室へ行くと、「せま
い所だなあ」と思いました。そこには、机が
並べられていました。右の方に教頭先生がお
られ、四年生の教室へ、案内して下さりまし
た。いよいよこの教室へ入らなければならな
いのです。

私は、「どういう子がいるのだろうか。」

「先生はどいうううたういなどと、いろん
なことを思ひながら、教室へはりました。

大明小学校とはちがうふんいきでした。私の

ことを各先生が、しょうがいされ、私に「泉さん、みんなにあいさつしなさい」と、いわれたけど、私は声ができませんでした。じどうも、ドキドキなっていました。それで、かわりに母に

「これからながよくしてやっ下ささい」と、あいさつしてもらいました。その日一日で、友達ができきました。今ではもうみんなにもなれ、友達の性格もわかります。

大町小学と比べて、桐山小学校の良所は、「卓球大会」「書初め大会」など、いろいろ大会があることです。その他勉強の時、みんな静かに、先生の話を聞くことです。大町小学校では、みんな先生の話を聞かなかったり、とちゅうで遊んだりしていたからです。

キャンプ

木越 栄仁(道上)

七月二十二日、いよいよキャンプです。ぼくのリュックは、組合のトラックにつめなかつたので、先生の車の中へ入れてもらいました。それから、車に乗ってキャンプ場へ行きました。

キャンプ場へついたら、車につんであった荷物をおろして、テントをはる所まで運びました。

先生にテントをばらばらに教えてもらい、ジャンケンで場所をきめてから、テントをつくりました。できあがると草をとってきて、テントの中へ入れました。草の上にしきいをして、リュックとか、ナベとか、フライパ

に悪い所は、男子と女子の仲が悪いことです。もう少し仲よくなつてほしいと思います。

ここへ来て、はじめての「卓球大会」は、とても楽しかったです。私はこの時はじめて、卓球というものをしたのです。ラケットはおじいちゃんにもらい、玉は母に買ってもらいました。クラスのみんなに教えてもらって、だいぶできるようになりました。だから、個人戦では一位になり、団体戦では、私達の赤組が勝ちました。まぐれかもしれませんが、とてもうれしかったです。六年生のは、町の卓球大会にもでました。

でも、おせやになつた先生方のこと、桐山小学校のことを、いい思い出にしたと思います。

かなどをおきました。

夜になると、花火をしました。その時、ぼくの花火がよくとびましたが、正志君の花火は、二十連発でもっとよくとんだので、各先生は、

「正志の花火ええやな」と、いわれました。

花火が終わって、テントの中へ入って、ねようとしたら、マナがきたので、剛君たちのテントに入ってもらいました。

次の日の夜、キャンプファイヤーをしました。歌を歌ったり、ゲームをしたりして遊びました。

キャンプファイヤーが終わって、テントの中へ入っていたら、おかあさんがきて、フア

ンクをくれました。その時、よしみが腹が痛
いと行って、家に帰りました。

その夜ぬる時、修君や伸一君が、テントの
中へ入ってきて、いっしょにぬました。

そして、最後の日に、ぼくと伸一君と和浩
君の三人で、いっしょにテントをどっ
てから、家に帰りました。

思い出のキャンプ

谷口 早苗(道上)

この六年間をふりかえってみると、一番の
思い出はキャンプです。

場所は舟川の上流で、とても景色のいい
所でした。荷物を運び終え、グループの人た
ちと、テントをはりました。

ました。

夜になり、キャンプファイヤーをしました。
花火をしたり、ゲームをしたりして、楽しく
すごしました。

キャンプファイヤーが、終わってからグル
ープの人たちと、トランプでババめきをして
いました。そこへ谷先生がこられて、いろん
な話をしました。そのあと少し遊んでぬまし
た。

朝になって、男子より早く起きて、着がえ
をしました。外にでてみると、鳥が鳴き、港
の音がザーザー聞こえ、とても気持ちよ
かったです。男子の人たちは、まだぬていま
した。テントから足が出ていたりして、とて
もふかしくて、つい笑ってしまいました。

テントの中に入り、弁当を食べ始めました
が、あまり食べたくなかったので、少し食べてか
ら、牛舎さんといっしょに外にでました。

夕方になって、テントの中へ入り、グルー
プの人たちと遊びました。ぬる頃になり、サ
ンな機になりました。けれども、なかなかぬ
れません。男子の人たちが、「おい、ぬた
かじって聞いたら、人のぬれを見たりにい
ました。

満君は朝ごころ、石の上にぬていたそうです。
しばらくたち、私は腹が痛くなりました。朝
食べた野菜汁が、悪かったようです。し
かし、昼までには直りました。

午後になると、谷先生がいろいろしやりました。
みんなはなつかしいので、手をふっていました。

最後の日の午前中は、あつとりつまにすぎ
てしまいました。私は「集団生活は、楽しく
て、すばらしいなあ」と、思いました。

私にとって、このキャンプの思い出は、一
生忘れられないと思います。

小学校の思い出

上島 淑美(道下)

今から六年前の四月、はじめて小学校に入
学しました。

入学式が終わって、教室の戸をみると、か
ざりが四・五本つるしてありました。教室の
まわりを見まわすと、後ろの黒板に、男の子
と女の子が、手をつないで校門に入ってくる
絵が、かいてありました。

入学してしばらくすると、楽しい給食が始まりました。また、さうじは六年生の人たちが、してくださりました。そして、毎日愛持ちの竹内先生に、見送られて家に帰りました。二年生、三年生、四年生、五年生、それぞれ、あやがしい思い出があります。そして、とうとう大生になりました。六年で一番の思い出は、キャンプと初めてすべったスキーです。

友だちにかしてもらったスキーで、はじめてすべった時は、どきどきして、とてもこわかったです。でも、少しずつ慣れてきたので、しほには、とてもおもしろくなりました。次はキャンプです。キャンプの前日は、とてもおもしろい。朝になって、で

キャンプ

杉田 真(小杉)

ぼくたち六年生は、七月末舟川の上流へ、キャンプに行った。

荷物を組合のトラックに積み、ぼくたちはマイクロバスと、先生や父兄の車に乗って行った。舟川に着くと、テントを張る場所まで、荷物を持っていった。運ぶのに苦労した。

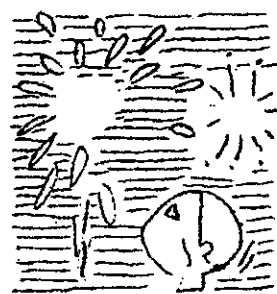
そして、荷物を整理して、テント作りにかかった。まず、先生が作り方の本を見せて下さった。それを参考に、グループごとに作り始めた。作り終わるとみんなは、家から持ってきた、弁当を開いて昼食にした。

そして、一休みしてから、キャンプファイヤーに使う、たき木を集めにまわった。

ていくしたくをしました。千春さんが来て、「行ってきます」と、行って家を出ました。

キャンプ場について、テントをはりました。そして、いろいろなことをしました。二日めの夜は、みんな集まって、歌やおどりをしました。家に帰ってからキャンプであったことを、家の人に話しました。

もうすぐ、中学生になるかと思うと、胸がどきどきしてなりません。中学生になったら、け、して小学校の思い出は、おぼえられません。



やがて、夕食が済むと、みんなは自分たちのテントにもどり、いろいろな話をしていたが、先生が、

「もうおなごり」

と、りかれたので、みんなおなごり。しかし、その晩はよくおなごりなかつた。

次の朝、朝食をすまし、みんなは川で泳いだり、川の生き物をつかんだりしていた。ぼくと榮仁君は将棋ばかりしていた。午後になつてまた、たき木を集めることになり、みんな一生けん命さがした。やがて夕食がすみ、キャンプファイヤーの用意をした。

ぼくたちや先生方、それに父兄のみなさんを集まって、キャンプファイヤーが、始まった。島さんが中心となり、歌ったり、踊った

り、夜もゲームをしたりして、とても楽しかった。

最後の日、軽く昼食をとり、帰るしるしをつけて、荷物をトラックに積み、マイクロバスと車で、学校に帰った。

キャンプ中、特に心に残ったのは、ニヤワニヤワのカレーと、キャンプファイヤーであった。

ほんとに、楽しいキャンプであった。

キャンプ

青木 政人(道上)

七月二十日、ぼくたち四、五人で先生の車に乗って、舟川上流のキャンプ場へ出発しました。みんなは一足先に、キャンプ場へ向か

いしましたが、ぼくたち四人は先生の車に乗って、キャンプに必要な食料品を、買い求めてから、キャンプ場に向かいました。

キャンプ場について、荷物を運び終わると、テント作りをしました。それから、かまど作り、米とぎ、おかず作りとつづいて、おそろになりました。しかし、その日夕食は、とてもおいしく思えました。

二日目の朝食が終わって、団体生活ではじめての、自由行動の時間になりました。それで、何をしていいのかわからなっていると、お君たちが大急ぎで

「上の流の方に、大きいへびがおったぞ。」
と叫びました。ぼくが

「だれが行ってくるぞ。」

たずね、リュックをかっぴりで、マイクロバスに乗りながら、もう少し、キャンプをやりたかったなあと、思っているうちに、学校に着きました。

このキャンプは、ぼくの一生の、思い出に出たなと思います。

キャンプ

前田 清二(桐山新)

ぼくたち五人は、去年の七月二十二日、舟川の上流へキャンプにいきました。

舟川の上流につくと、まずはじめに、まきやテントや、リュックサックを、キャンプ場に運びました。

その日、おきてみると、みんな起きていて、ぼくが一番最後でした。前の日は、一番最初に起きていたので、とても残念でした。

帰りの時間がやってきました。テントをか

その中へ自分の荷物を入れました。持つてきたカニジュースは、川に入れてひやしました。また、かまどを作るのに、大きな石を持ってきて、鍋がのるようにはしました。

ぼくたちのグループの人と、テントの中へ入って、マニガの本をしばらく読んでから、川の上の港のオへ、遊びにいきました。遊んでいると、笛がなったので、テントのオへ帰って、すいかを食べました。

やがて夕方になったので、ごはんをつくって食べ、あとしまつをしてから、テントの中へ入って、毛布をかぶってねました。

朝六時ごろ起きて、顔を洗ってから、ラジオリ体操をしました。朝ごはんが終わると、川で遊びました。帰ってきてから、しゅうぎを

みたり、おかしを食べたり、本を読んだり、カセットを聞いたりしました。

お昼ごはんの時、テントの中があつかったので、川原の中で食べていたら、先生に写真を撮ってもらいました。

二日めの晩には、キャンプファイヤーをしました。歌を歌ったり、いろいろなゲームをして遊びました。

三日めのお昼ごはんが終わってから、テントをかたづけ、帰る用意をして、学校に向かいました。



六年間の思い出

池原 恵子(道下)

小学校へ入学してから、卒業するまで、もう、六年間が過ぎようとしています。

毎日、学校へ行き、帰ってくる、そんなことと大早間もやってきました。ごく、あたりまえのような気がしますが、その中には、うれしなこと、悲しきこと、哀れなこと、悲しいことなど、いろいろな思い出があります。

その中でも、心に残っているキャンプを思い出しています。

「フアー、まじい」

私たちのグループは、いつも、キャンプの食事の時、こんなことを言っていました。

迎いの盛田先生や、他の先生方といっしょに、二泊三日の舟川のキャンプに、行った時のことです。

私たち六人グループは、食事をつくることが、いつも一番最後でした。それでも、おいしいのち満足をしますが、とても、おいしいとはいえません。ほかのグループは、おいしそうに食べているのに、水を飲むと、私たちの食事が、なおまずく、感じるような気がします。

キャンプファイヤーは、とってもすてきでした。みんな中に焼くまきにはきをつけ、そのあぐりに、わたしがまじりました。そして、いろいろなゲームなど、して遊びました。キャンプが、おもしろいが、おもしろくないか

は、半分はキヤンプファイヤーで決まると、
いわれるようですが、ほんとうはそう思ひま
した。

かつう、家にいる時は、よかあさんが、食
事をしてくれるので、あまり自分で、食事を
作りませんが、キヤンプでは、そういうわけ
にはいきません。

このほかにも、キヤンプは夏でしたから、
テントの中も外もとても暑く、おまけに、暑
さを防ぐものは、何もないので大変でした。

この二つには、とても苦しましましたが、それ
と同時に、良い経験にもなりました。

キヤンプのほかにも、運動会、遠足、学習
発表会など、いろいろなことがありました。そ
れらの全部が、小学生生活の、良い思い出に

テント作りが終わると、テントの中へ入っ
て、家から持ってきた、おにぎりを食べまし
た。みんないろいろ、おしゃべりしながら
食べていました。

夕方にちると、先生方に放之てもらうて、
ごはんを作りました。その時のごはんは、あ
まりよくできていませんでした。

次の朝、朝食を食べながら、川で遊びまし
た。おにぎりと、キヤンプファイヤーをし
ました。火をここんで、歌を歌ったり、ゲーム
をしたり、花火をしたりしました。

キヤンプファイヤーが終わると、自分たち
のテントへ帰って、いろいろ遊びをしまし
た。その晩はぐっすりと、よくお休みまし
た。

三日めの朝は、川原で食事をしました。あ

なるだろうと思ひます。

キヤンプ

坂東 保敏(田ノ又)

ぼくたち六年生は、七月二十二日から三日
間、舟川の上流でキヤンプをしました。

ぼくのグループは、修君、政人君、伸一君、
半子さん、野上さんに、ぼくをふくめた六人
のグループでした。

二十二日の朝、車に乗って、舟川の上流へ
向かいました。山道は大変悪かったです。け
しきはとても暑しかったです。

キヤンプ場に到着し、リュックや荷物を運ん
でから、テントを作りました。みんな順当よ
く作っていました。

とがたづけをしてから、川や山で遊びまし
た。ごはんを食べながら、学校へ帰る用意をし
ました。テントをこめて、袋につめ、荷物を
運びました。

そして、ぼくたちは、マイクロバスに乗っ
て、学校へ帰りました。その晩は家でぐっす
りと休みました。

キヤンプ

長島 伸一(道下)

七月二十二日ぼくたちは、岩崎のトラック
に、荷物を積んで、マイクロバスに乗り、二
泊三日のキヤンプに出発しました。

山に着くと、トラックから荷物をおりし、

それを川を渡った所まで運びました。三日月

どぶうふくして、全部の荷物を運び終わりました。それから、お手をいっぱい集めてきて、下にしいてテントを作りました。

次に、集めてきた石を積んで、カマドを作りました。晩になると、先生に教えてもらって、ごはんをつくって食べました。

次の日ぼくは、いろいろなことをして、遊びました。たとえば、トランプ、しりとり、木で石をとばすことなどです。

そのほか、川の中に入って、石で氷をとめたり、トランシーバーで、遊んできました。また、ずうっと上の空で、夢があったので、そこで寝ました。

ううしてゐるうちに、三日間がすぎ、はなへ帰る日がきました。テントをしぼつする時

は、はじめにくりを取り、テントをたたき、支柱をとりこわしました。テントをくわは、袋の中にきちんと入れました。それらの荷物を、トラックまで、運びながら、ぼくはもう一度ここへ、キャンプに来たいなあと思いました。



ぼくの夢・わたしの夢

谷口

早苗

私の夢は、弟と妹と一緒によい、日本中を旅行することです。

坂東 聡

ぼくは大きくなったら、オーストラリアに行つて、牧場を持ちたい。そして、羊や牛や馬をかって、いっしょにくらしたい。

長島 伸一

大きくなったら、ラジコンの車、ラジコンの飛行機など、ラジコンをいっぱい集めたい。

吉田 修

ぼくは、大人になったら、プロ・レーサーになりたいと思う。

私は婦人警官になりたいのです。推理がすきなうで、みんなに信頼される、警官になりたいと思います。

青木 千春

吉田 剛

ぼくは、機械いじりが好きなので、プラモデル屋になって、お金をもうけ、父母に親孝行をしたいと思っています。

池原 恵子

たぶカッコがいろいろでなく、いろいろな国へ行けて、いろいろな人たちに会えるから、スナック・デスになりたいと思います。

水越 正志

ぼくの夢は、会社の社長になって、お金をもうけることです。

前田 清春

やがて大きくなったら、ラジコンの車を、
動かしてみたいと思う。

上島 淑美

もっと踊りがうまくなって、どこかへ行っ
て、踊ってみたい。

水越 栄仁

オリンピックの、体操の選手になりたい。

ぼくは、体操がすきだから。

松田 満

やがて大人になったら、自分の好きな店を
開いて、自分の好きなことをして、くらした
い。

長島 貴子

看護婦さんになることが、私の夢です。

中川 和浩

大きな会社をたてて社長になり、お金をも
うけて、親孝行をすること。

青木 政人

大人になったら、サッカークの選手になって、
大活躍したい。

坂東 保敏

立派な仕事をして、お金をたくさんもうけ、
家建て、世界旅行をしたいと思ひます。

青木 克己

ぼくの夢は、大きな船の船長になって、世
界中をまわることです。

前田 清二

大きくなったら、ラジコンの車やラジコン
の飛行を、いっぱい集めてみたい。

杉田 真

A級ライセンスをとり、プロレーサーにな
って、いろんなサーキットで優勝し、世界一
のレーサーになりたい。

鍋谷 謙二

学校を全部卒業して、プラモデル屋をつく
るのが、ぼくの夢である。

上田 洋子

私の夢は、パリのベルサイユ宮殿を見学す
ることと、ジヤルジエ家へ行って、オスカル
の絵と見ることです。

鍛冶 聡美

日本牛を、まわってみたい。

中田 泉

学校の先生になりたいと思ひます。

尊敬する人

「スコット」

吉田 修

アムンゼン隊に、極点への一番乗りのお光
をさうわれ、死に直面しながらも、この旅行
を、少しもくりてはりなかつたから。

「両親」

中田 泉

どんな時でも、家のために、いっぱいしうけ
ん命、働いてくださるから。

「ワット」

吉田 剛

ワットが、電気を発明してくれなかったら、
今ごろは、ろうそくをともしたりして、大変
暗い生活を、していなければならなかったか
もしれないから。

「おかあさん」

長島 豊子

一人で、いっしょうけん命になって、私を
育ててくれたから。

「シニバイツアー」

松田 満

アフリカの黒人のために、一生をささげ、
ノーベル平和賞を受賞したから。

「おかあさん」

水越 栄仁

朝早く起きて、そうじや食事をし、仕事か
ら帰ると、また、ごはんの用意して、やっと
休まれうから。

「宮崎松記」

杉田 真

約二百五十万人もいる、インドのらい患者
を、救うために、一生をささげようとしたか
ら。

「野口英世」

中川 和浩

自分の命ですべて、人々の命を救おうと
したから。

「おかあさん」

池原 恵子

父が死んでから、一人で私と姉を育ててく
れました。そのがけには、大変な苦労があっ
たと思います。

「添頭信」

青木 政人

ぬす人の気持ちも理解する、知恵を兼ね備
え、人々の信望を集めた人だったから。

「先生」

青木 文己

いろいろせわをして下さったし、わからな
い所があったら、親切に教えて下さったから。

「ユノキの店の人」

鍋谷 謙二

アラモデルや車のことを、いろいろ親切に
教えて下さるから

「父」

二島 淑美

何でも買ってもらえるから、おこると大変
こわいけど、ほんとはとてもやさしい人です。

「オスカル」

上田 洋子

4でありながら、国カとして育てられ、恋も
できずに、ただ、国民のために戦って、死ん
でいったから。

「父母」

水越 正志

ぼくをここまで、育ててくれたし、ぼくの
ために、お金をためていろから。

「父」

青木 十春

相談しやすく、何でも買って下さるし、サ
サしいから。

「野口英世」

坂東 保敏

食しい家に生まれながら、一生けん命勉強
して医者になり、人々のためにつくしたから。

「ユノキの店の人」

前田 清二

剛君のプラモデルが、不良品だった時、自
分のタイヤをくださったから。

「両親」

坂東 聡

病気になる時、いろいろと、面倒をみ
て下さったから。



「ニュバイツアー」

長島 伸一

黒人のために、一生をささげたので、

「ナイチンゲール」

鍛治 聡美

戦争でけがをして人に立ちまわらず、一生けん命看病して、助けてあげたから、

「父」

谷口 早苗

きびしいけど、私の欠点を言って下さった

り、ほし物を買って下さるから、

「ニュバイツアー」

前田 清春

アフリカ大陸に渡って、黒人の幸福のため

に、一生をささげたから、



「最後の授業」

「極点の旗」

「海底二万海里」

「フランジースの犬」

「第二次大戦前夜」

「フランジースの犬」

「極点の旗」

「野口英世」

「エベレストを目ざして」

「ニュバイツアー」

「極点の旗」

「源三頼信」

「河東素ori」

心に残った書物

坂東 聡子

前田 清二

坂東 保敏

青木 政人

中川 和浩

水越 正志

長島 伸一

鍋谷 謙二

前田 清春

杉田 真

水越 栄二

松田 浩

卒業を祝して

校長 竹内 佐四郎（入善町入膳）

いっしょにべんきょうし、いっしょにあそ

び、ときにはけんかして、すごした大け年。

思い出をだいに、きつとよい中学生になっ

て下さい。

教頭 川瀬 秀雄（入善町東狐）

人の道は 誠と 友愛である。

常にこの心がまえで生きるならば

人生は豊かになるであろう。

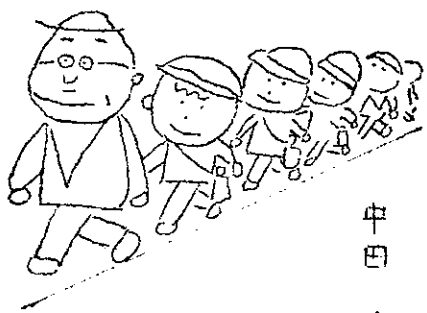
担任 盛田 親義（入善町新屋）

わずか一年の担任であったが、良きにつけ

悪しきにつけ、思い出に残る組であった。

素直で明るい人間に 成長してもらいたい

と思う。いつまでもお元気で



「少年ジャンプ」

吉田 剛

「アルプスの少女ハイジ」

吉田 修

「アルプスの山の少女」

谷口 早苗

「椿姫」

鍛治 聡美

「決闘ルパン対ホームズ」

青木 千春

「フランジースの犬」

池原 恵子

「ベルサイユのバラ」

上田 洋子

「しらゆき姫」

上島 淑美

「幸になつたお姫さま」

長島 貴子

「家なき子」

中田 泉

六年間の成長の足跡

(身長と体重の増加)

氏名	項目	体 重		身 長	
		入学時	卒業時	入学時	卒業時
長島 伸一		22.6kg	42.8kg	117.5cm	151.7cm
吉田 修		18.8	32.2	113.8	145.2
水越 栄仁		16.6	26.2	110.2	140.1
坂東 保敏		18.5	35.4	111.5	144.1
坂東 聡		20.8	39.0	111.8	140.8
中川 和浩		19.6	29.4	109.0	136.8
吉田 剛		17.8	32.9	111.7	144.9
前田 清春		17.8	32.0	111.7	140.2
前田 清二		18.7	32.0	113.1	143.0
松田 満		21.4	45.4	116.8	159.5
水越 正志		15.1	32.2	104.5	132.0
鍋谷 謙二		17.5	31.4	110.0	139.0
青木 政人		21.1	41.2	115.3	151.3
青木 克己		22.6	35.2	120.3	150.8
杉田 真		23.4	55.9	123.0	161.7
谷口 早苗		19.6	38.8	115.3	151.3
長島 貴子		20.6	42.0	114.3	145.5
上島 淑美		17.7	36.6	110.5	146.2
上田 洋子		19.2	41.0	113.2	151.2
中田 泉		19.2	40.2	112.7	148.3
鍛冶 聡美		18.6	42.0	112.1	148.3
池原 恵子		17.9	41.2	112.7	147.9
青木 千春		17.8	43.2	110.8	147.3

前任 谷 昌嗣(入善町西恩部)
「友情こそ人生の宝なり」

六年間同じ学校の同じ学年で勉強した三三名の仲間は、これからのみなさんの人生で大きな心のささえになってくれるでしょう。

人の立場を考えてこそ、自分も考えてもらえる。ひとりよがりでは相手にしません。

元担任 竹内 静子(入善町入膳)

この六年間にきたえた体力をもとに、努力を惜しまないで、精いっぱいがんばってください。大地に根をはった大樹のように、大きく伸びてください。

教諭 米沢 久(入善町入膳)

高い山からのながめと、低い所からのながめと、どちらがいいかな。

昌嗣は、これから、どんな高さまで登れるかな。カーブががんばってみよう。

教諭 大田 好雄(入善町棚山新)
飾った美は、いつかははげてきます。充実した実はよい花を咲かせます。身も心も鍛え

よい人生をつくりあげよう。

教諭 柏原 望子(入善町入膳)
心に太陽、くちびるに歌

苦しい事や悲しい事に出会ったら、決して挫折しないで、希望をもって明るく強く進んでください。きっと、道は開けていきます。

教諭 本瀬 蕙(入善町春日)

友だちとは、よいものです。

よい友になるようにがんばり、よい友をつくってください。

三